

荒このみ

著書『黒人のアメリカ・誕生の物語』一三七頁 筑摩書房
一九九七年一二月

伊藤英人

研究論文

・「中期朝鮮語正音表記漢字語及び漢語借用語について―声調を中心に―」、日本語と外国語との対照研究Ⅱ『日本語と朝鮮語』下巻 研究論文編、国立国語研究所、一九九七年三月 pp.313-340

・未刊)「中世朝鮮語のテンスとアスペクトの範疇について―「月印積譜」卷一二地の文の用例分析―」(原文中国語韓国学叢書『韓国学論文集』第五輯 杭州大学韓国学研究所編 一九九七年一二月刊行予定)

・未刊)「日本定住コリアンのうち総連系民族学校出身者を中心とした社会で使用される朝鮮語に関する研究の必要について」(原文朝鮮語)『中央アジア朝鮮人の歴史・文化・言語』(forthcoming)

その他の形態による研究業績

・「漢文明の受容 言語と文字」『もっと知りたい韓国』第2版』、孔文堂、一九九七年一二月、pp.71-84

・朝鮮語専攻の語学教育と語学教材について、平成七年度教育研究学内特別経費プロジェクト「世界各国の外国語研究と外国語教育に関する調査・研究」一九九七年六月、二〇ページ

口頭発表

・日本定住コリアンのうち総連系民族学校出身者を中心とした社会で使用される朝鮮語に関する研究の必要について、国際大会「中央アジア高麗人の歴史・文化・言語」、カザフスタン共和国科学アカデミー、一九九七年七月

・「中世朝鮮語のテンスとアスペクトの範疇について―「月印積譜」卷一二地の文の用例分析―」、第二屆韓国伝統文化国際学術研討会、中国杭州大学、一九九七年一〇月

岩崎務

研究発表

「ティブツルスのローマー第2巻第5歌―」、日本西洋古典学会第48回大会、一九九七年六月。

論文執筆

「予言詩人としてのティブルス」第2巻第5歌に描かれるローマー」、日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第46号(一九九八年三月)掲載予定。

翻訳

セネカ『オエディプス』(『セネカ悲劇集2』所収、京都大学学術出版会、一九九七年九月)。

上田玲子

(1) 論文

「現代ラオス語の名詞述語文について」『東大東南アジア学』第6号、pp.1-15、東京外国語大学

(2) 研究ノート

「現代ラオス語の文末詞について」『語学研究所論集』第2号、pp.19-30、東京外国語大学

Basic Words List of Lao Dialects in Central Lao, Institute of Cultural Research, Vientiane (共著)

(3) その他

「アジアの言語事情」ラオス』『言語』一〇月号、pp.58-61、大修館書店

「ラオスで暮らして」『東南アジア研究』第35巻1号、pp.170-174、京都大学東南アジア研究センター

牛島信明

現在のほとんどの研究活動は主として、「世界(文学)のなかのドン・キホーテ」に向けられている。まだ準備の段階だが、『ドン・キホーテ』が出版されてから、各時代の主たる文芸思潮(あるいは国)がこの小説をどのように評価してきたかを、現在のラテンアメリカの作家たちに至るまで、たどってみたいのである。資料は、世に出ているもの(それほど多くはない)、そして入手可能なものは遺漏なく集めているつもりなので、あとは時間の問題であるが、まともれば面白いものになるのではないか、という予感はある。

しかし今年、より多くの時間を割いたのは『ドン・キホーテ』の翻訳である。四半世紀にわたる研究の成果をすべて注ぎこんでの全訳で、これまで二三分の二ほど終わった。すでに様々な形でかなりの量を翻訳していたこともあって、



比較的順調に進捗している。
 こんなわけで、今年もまたドン・キホーテとの付き合いに明け暮れた。

岡田和行

・「ゲレクバルサン バボーギーン」「サンダク ホーリチ」『世界文学大事典』、第2巻、集英社、一九九七年一月二五日、一〇四、三三〇頁。
 ・「バダルチ ロブサンダシーン」『世界文学大事典』、第3巻、集英社、一九九七年四月二五日、四三六頁。

・「マーム ドウゲルジャビーン」「ロチン ソノミーン」「ロブサン・ホールチ」「ロブサンワンダン ソノミーン」『世界文学大事典』、第4巻、集英社、一九九七年七月二五日、二八〇、八八九、九〇三、九〇四頁。
 ・“Д.Налагдоржийн «Памбугайн нулимс» өгүүлэлийн дүрийн асуудалд” [D.ナツァグドルジの短編「お坊さまの涙」の人間像の問題について] (口頭発表) Seventh International Congress of Mongolists, Ulaanbaatar, Mongolia, 14 August, 1997.

・“Д.Налагдоржийн «Памбугайн нулимс» өгүүлэлийн

дүрийн асуудалд” [D.ナツァグドルジの短編「お坊さまの涙」の人間像の問題について] «Идг товчоо» (「イル・トプチャョー」新聞)、イル・トプチャョー新聞社、第31号(通号二五四)、一九九七年八月一三・二二日付、六、一三二面。
 ・「革命作家グループ」「国家賞(モンゴルの)」「ツォグ」「ナツァグドルジ賞」「文学芸術」「モンゴル作家同盟」「モンゴル文学」『世界文学大事典』、第5巻、集英社、一九九七年一〇月二五日、一六一、二八八・二八九、五三七、五八八、七二八、八二〇・八二二、八二二・八二二頁。
 ・「第7回国際モンゴル学者大会第3部会(モンゴルの文学・芸術・文化)報告」(口頭 発表)一九九七年度日本モンゴル学会秋季大会、岡山大学農学部、一九九七年一月一五日。

岡田知子

研究

・一九八〇年代社会主義時代の文学について
 特にヴァンディ・カオン作「魔物の島」について

翻訳

・「姉さん」マイ・ソンソティアリー作『東南アジア文学』

所員活動報告

第3号 (東南アジア文学会) 掲載

・「魔物の島」ヴァンデイ・カオン作『東南アジア文学』第4号 (東南アジア文学会) 掲載

・「つきあい」ソット・ポリーン作『東南アジア文学』第5号 (東南アジア文学会) 掲載予定

・「なぜ」マイ・ソンソティアリー作『アジア文学』第3号 (アジア文化社) 掲載予定

・“My Sister” by May Sansotheary

・“Some day I Hope” by Nakhataray

(以上2点英訳 Southeast Asian Studies Center, California State Universityにて現在編集中の『東南アジアの女性作家による短編小説(仮題)』に掲載予定)

その他

・「特集アジアの言語事情—カンボジア」『月刊言語』一九九七年一〇月号 (大修館書店) 掲載

・「カンボジア現代文学の今」『アジア文学』第3号 (アジア文化社) 掲載予定

・初級文法、会話のテキスト作成 (三〇課分)

奥平龍二

・展覧会の開催及び関連書物出版

1月18日～3月5日「懐かしい未知の国・ミャンマー展」(フジタ ヴァンテ・ミュージアム主催)を監修、マスコミ報道によって醸成された一面的なミャンマー像を払拭するため、とりあえず政治と観光を抜きにして、現代に生きるミャンマーの伝統文化を写真・映像・造形を通じ紹介した。同展覧会に合わせてミャンマーの伝統文化の入門書として『ミャンマー 慈しみの文化と伝統』(フジタ ヴァンテ編、奥平龍二監修、東京美術、167頁)を併せて出版した。同書の中の「序」(4-15頁)でミャンマー文化の源流とその特徴について解説し、また、分担執筆では「家族の慣習」(38-49頁)を担当し、慣習法の仏教化・家族の構成原理・家族の人間関係・婚姻慣習・財産権と相続権などミャンマーの伝統的慣習と法について論じ、「おわりに」(162-165頁)において書物全体の締めくくりを行った。さらに展覧会開催期間中に催された「講演とトーク」(2月22日)において、「ミャンマー文化とその源流」と題して講演を行い、また、ミャンマーの伝統音楽及び民間信仰に関して講演を行った音楽研究家及び写真家とのトークを主宰し、仏教と精霊ナツと音楽の関係を議論した。

・講演

6月15日(日)、第23回「日本ミャンマー友好協会」総会(於名古屋国際センター)において「現代に生きるミャンマーの伝統—家族の法と慣習を中心に—」と題する講演



を行った。その中で、東南アジア大陸部の歴史的・文化的枠組み、ミャンマー文化の特徴、仏教徒ミャンマー人家族の法と慣習について論じ、最後に、ミャンマー人の倫理観から見た現代日本の家族問題への提言を行い締めくくりました。

・学会・研究会への参加

パース学仏教文化学会（第11回大会） 5月31日 於愛知学院大学）、東南アジア史学会大会（第57回大会） 6月7日8日 於上智大学 第58回大会11月29日30日於大阪大学）及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語・文化研究所研究プロジェクト「東南アジアにとって20世紀とは何か」に参加した。

加藤雄二

アメリカ19世紀の小説についてまじめに考えようという意気込みは、お勉強だけで空回りした観がある。本年はハーマン・メルヴィルの作品について依頼された小論に始まり、その後は外語大着任当時の専門領域であるウィリアム・フォークナーの研究によりやく戻ることができると思う。テリー・イーグルトンの翻訳のタイトルにもなっている「文学とは何か？」という問いは、結局のところ作品

そのものの鑑賞によるしかない、というあたりまえのことが、再びフォークナーを読むことによつて実感できるかもしれない、という期待を持ちながら。成果として「フォークナー、『雨の木』を聴く女たち」、そして『世界の終わり』とハードボイルドワンダーランド』という小論があるが、これはフォークナー生誕100周年にあたる今年、かならずしも学問的ではなく感傷的・感情的に、フォークナーと日本文学の関連を語ろうと試みたもの。以前から心にとめていた、日本のコンテクストでのフォークナーという、大げさに言えば「大問題」であったテーマを、できればわたしたちが現在抱えている問題意識と関連させて考察することをめざした。今後はしばらく休んでいたフォークナー研究を本格的にやってみる予定です。

亀山郁夫

・著書（共著）

『ファシズムの想像力』（人文書院、八月、「独裁者との対話、ブルガーコフとスターリン」）

・翻訳（単行本）

ユーリー・ボレフ『スターリンという神話』（岩波書店、一月）

所員活動報告

ソフィア・ヘーントワ『驚くべきシヨスタコーヴィチ』（筑摩書房、三月）

アンドレイ・プラトノフ『土台穴』（国書刊行会、十一月）

・論文

「ゴリキーとスターリン」（『思想』、六月号）

「プラトノフの『ジャン』（『ユリイカ』総特集「二〇世紀を読む」四月）

「ロシア文学の現況と翻訳・研究一九九六」（『文芸年鑑』、新潮社、六月）

「20世紀ロシア文化とプラトノフ」（『プラトノフの会』会報、一二月）

・エッセー

シヨスタコーヴィチの快楽（『東京新聞』夕刊、一月一五日）
ドストエフスキーを主題に愉快なへ擬小説（『毎日新聞』夕刊、三月五日）

むしばみ合う「正史」と「偽史」（『毎日新聞』夕刊、四月三〇日）

文学の原点への「回帰」を意識（『毎日新聞』夕刊、六月二五日）

余計者がテーマの現代的帰結（『毎日新聞』夕刊、八月二十日）

アヴァンギャルドを守る不屈の精神（『毎日新聞』刊、同年十月十五日）
悪意に満ちた「迷宮」描く露ブツカー賞作品

（『毎日新聞』夕刊、十二月一〇日）

・翻訳（雑誌）

ウラジーミル・ソローキン「仕事の話」（『文藝』一九九七年冬号）

・書評

桑野隆『夢見る権利』（『週間読書人』二月二八日）

ウグレシイチ「バルカン・ブルース」岩崎稔訳、未来社（『東京新聞』、十月一九日）

・百科事典項目執筆

集英社『世界文学大事典』（『ロシア文学』編集・執筆）

マイクロソフト『エンカルタ大百科』（『ロシア文学』翻訳）

川口健一

〔著書〕

『二四時間使えるベトナム語』（単著）自由現代社一九九七年

年
〔文学雑誌〕（翻訳を主とする雑誌）

『東南アジア文学』2号東南アジア文学会一九九七年一月

『東南アジア文学』3号東南アジア文学会一九九七年四月

『東南アジア文学』4号東南アジア文学会一九九七年七月

〔エッセイ〕

『文学のドイモイとドイモイの文学』『すばる』集英社



一九九七年三月号

「ベトナム語 メロディアスな言語」『英語教育』大修館
一九九七年五月号

「北ベトナムは今」「すばる」集英社一九九七年八月号

「金雲翹」「しにか」大修館一九九七年八月号

「2人の作家」「すばる」集英社一九九七年二月号

「『英雄主義』を越えて」毎日新聞夕刊一九九七年二月六日

〔学外活動〕

日本ペンクラブの仕事で九月中旬にハノイとホーチミン市のベトナム作家協会を訪問。同協会副総書記のヒュー・ティン氏（詩人）はじめ、二〇名あまりの文学者たちと会った。

川辺光

・題名「外語大スポーツ100年の史的研究」

報告機関 東京外国語大学・1996年度教育改善推進経費成果報告書（34頁）共著：川辺光、東憲一

内容 本学は1999年（平成11年）4月に独立100周年を迎える。この機にあたり、外語大スポーツ100

年の歩みを回顧し、その史的研究を行う。資料収集、埋もれている事実の発掘、個々の資料を一つに集め、体系化を図る。合わせて、21世紀の外語大スポーツ、教育の発展の基礎資料とする。今回は明治期に焦点を当てた。

・題名「事故防止マニュアル」

報告機関 東京外国語大学学生部 スポーツ・レクリエーション（pp.21-25）

内容 研究活動ではないが、本学新入生・運動クラブ員を対象に、スポーツ活動によって死亡、廃疾事故が起こってはならないという課題に対し基本的事項・運動種目別・救急処置について執筆した。

沓掛良彦

・P・マトヴェイエーヴィチ『地中海・ある海の詩的考察』（共訳）の翻訳を上梓。（平凡社。九七年一月刊）

・二月～二月 ナポリ東洋大学で比較文学講義。外国語で講義するのは実にむずかしく、自分のイタリア語がいかにダメであるかを痛感。講義のない日は本を読まず、小さな島暮らしの利を生かし、ベランダに出て、終日地中海を「読む」。

・一〇月より雑誌『しにか』に漢詩を中心とするエッセイ『古典詩の東西』を連載中。

・酒を酌みつつ、論文『芭蕉の酒』を執筆。（『比較文学研究』掲載予定。九八年一月）芭蕉に関する研究文献をまとめてかなり読んだが、国文学者の諸センセイのアタマの固さに閉口す。しかしあれが本当のガクモンというものであろう。

・ピエール・ルイスの小説『アフロディテ』を翻訳。（九八年一月上梓予定、平凡社）

・中村真一郎『王朝物語』解説執筆。（新潮文庫、九八年二月刊行予定）

・イタリア女流作家の小説『千々の秋・紫式部の生涯』を翻訳中。とはいえ、雑事による多忙と怠惰、夜々酒友たちと酒瓶を倒すのに忙しかったため、ちっとも進捗せず。完成のめどは立たず。お迎えが近い歳になったせいも、外国語を読むのが面倒くさく、横文字がほとほと嫌になってきた。そろそろ横文字屋「廃業宣言」を出そうかと思案中であります。

栗田博之

・論文 ニューギニア「食人族」の過去と現在

春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』用の論文だが、まだ原稿が出揃っていないので、結論部に手を入れる予定。

・書評 山本泰・山本真鳥『儀礼としての経済』

『民族学研究』62巻1号に掲載された。かなり上品に批判したつもりだが、何人かの同業者から非常に手厳しい書評であるという評が寄せられた。

・翻訳 ベイトソン『ナベン』

共訳者とともに全体の粗訳を完了してからもう何年も経つが、訳文の手直しが遅々として進まず。いつになったら完成稿になるのやら、全く見当が付かない。大学や学会の雑務が多過ぎる！

三枝壽勝

論文（いずれも朝鮮語）

「秩序逸脱者と意識喪失のモチーフ」『作家研究』第三号



(1997.4.10) pp.363-387

「鄭芝溶の詩『郷愁』に現われた単語に関する考察」『詩と詩学』29号 (1997.6) pp.168-189

監修

『最新日韓辞典 (日本版)』大同文化社、紀伊国屋書店
1997.6.20

柴田勝二

・著作 (共著)

『日本文学史事典現代編』(東京堂出版、一九九七年五月)
「全共闘世代の文学」の項。

『日本近代文学を学ぶ人のために』(世界思想社、1997年7月)「大江健三郎」の項。

・論文

「三島由紀夫『憂国』論―「大義」としての肉体」(「相愛大
学研究論集」第13集、一九九七年三月)

「『日常』の成立―『ジェシーの背骨』」(「国文学」一九九七
年七月号)

「大江健三郎と沖縄」(「敍説」No.、一九九七年八月)

「『作家』たちの言説―『サド公爵夫人』論」(「国語と国文

学』一九九七年二月号)

鈴木聡

翻訳 テリー・イーゲルトン『表象のアイランド』(紀伊
国屋書店)

書評 ロイ・フォスター『W・B・イェイツ伝』第1巻(オッ
クスフォード大学出版局)、『学燈』11月号
その他 シンポジウムでの発表

関口時正

自分にとって「研究」という言葉があてはまるような活動
はほとんどありませんでした。5月にチェンストホーヴァ
教育大学(ポーランド)で開かれたポレスワフ・プルス国
際学会の求めに応じて、「プルスの日及び日本人論」とい
う原稿を書いて送りました。これは、19904年に日刊新
聞 Kurier codzienny 紙上でポーランドの作家プルスが『日本
及び日本人論』と題して連載したものの未完かつその後は
未刊の論考を発掘して、その他プルスが日本に言及してい

る文章を併せて紹介、比較文化論の立場からコメントしたり、フェリクス・ヤシエンスキの日本論と比較したものです。右の学会論集に収められて近日中に刊行されます(日本語訳は『西スラヴ論集』第3号に掲載予定)。9月にはウッチ大学(ポーランド)で開催された国際ポーランド語・ポーランド文化教育者会議で「ヨーロッパ人の自己認識史におけるポーランド」という基調講演をし、これももうすぐ公刊されますが、6年ほど前から授業で扱い、97年度には外語大や東大文学部で講じた議論の要約のようなもので、研究が前進したものではありません。日本語で発表する予定はありません。9月のポーランド滞在中には、同時に文部省科学研究費総括班の仕事で、ポーランドにおける国際学術研究の現状と支援体制を調査しました。この報告は98年度に公表します。

田中敏雄

モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948) の『真理へ近づくための真なる実験——自叙伝』(Satyana prayogo athva atmakatha. Amdavad, Navajivan Prakashan Mandir, 1969 c 1927) の翻訳を9月に終えた。約4年、かかった。グジャラー

ティー語のテキストを読むのは楽しく、ヒンディー語訳と英語訳を参照して調べるのは面白く、翻訳は苦痛であった。各分野の専門家に関連事項のチェックを依頼し、第2稿を用意する予定である。

『自叙伝』は、一九二五年一月二九日より一九二九年二月三日にかけてグジャラーティー語週刊紙『ナヴァジーヴァン』(Navajivan)に掲載されたものである。英語訳は、一九二五年二月三日より一九二九年二月七日にかけて週刊紙『ヤング・インディア』(Young India)、ヒンディー語訳は、『ナヴァジーヴァン』ヒンディー語版にそれぞれ掲載された。

英語訳は、An Autobiography——The story of my experiments with Truth, vol.1 in 1927, vol.2 in 1929.として刊行された。改訂第2版は1巻本として一九四〇年に刊行された。

戦前、高田雄種氏によって『真理探究者の手記(二)(終)——私の真理に関する物語』(1928-30)、金井爲一郎氏によって『全訳ガンジー自叙伝(上・下)——真理と偕なる我が実験談』(1942)が刊行されている。いずれも初版を底本としている。

戦後、刊行され今日まで読まれているのが、嶺山芳郎氏による『自叙伝——真実をわたしの実験の対象として』である。底本は、An Autobiography——The story of my experiments with Truth. Ahmedabad, Navajivan, 1952.である。ガンディー自身の自伝的著作には、『自叙伝』の前にグジャ



ラーティー語で執筆された『南アフリカにおけるサツティヤークラハの歴史』(Dakshin Afrika man satyagrahano itihās)がある。ここで述べられている南アフリカでの政治闘争は『自叙伝』から省略され、読者に『南アフリカにおけるサツティヤークラハの歴史』を読むように薦めている。ところがガンデー没後、ガンデー著作編集委員会は1冊で完結した『自叙伝』の編集出版の必要を認め、『自叙伝』英語訳改訂第2版と『歴史』の英語訳版、Satyagraha in South Africa. Ahmedabad, Navajivan, 1928. をそれぞれ整理、編集し、『自叙伝』と同じ書名で出版したものである。私はこの整理、編集を疑問に思っている。

日本語訳者の3人に共通するものは、ガンデーのメッセージを伝えようとするミッシン精神である。高田氏は先人として、金井氏はキリスト者として、蟬山氏はジャーナリストとして。

ガンデーがグジャラートの読者たちに語りかけた話しことばに、できるだけ近づこうと努力したのは自分の勉強のためである。

私はヒンディー現代文学を読むもので、テーマは戦間期である。作家、作品論の作業を進めるうちに、作家たちはガンデーの思想と行動を避けられないことが分かるようになった。一〇年間、作業を中断して、グジャラーティー語を勉強し、グジャラーティー語によるガンデーの著作を読もうと決めたのである。なんと遠回りをしてしまっ

たのか。

谷川道子

最近あちこちに新しい劇場ができて、ドイツ現代演劇が専門の私にもそういった演劇現場への寄稿や協力が増えています。それも私の研究活動の一端とみなして報告します。

1月25日号、図書新聞 ムネーモシユネー―記憶の劇場と哄笑するテキストハイナー・ミュラーの遺作『ゲルマーニア3 死者にとりつく亡霊たち』

シアター・コミュニケーションビデオ・トークによる『世界演劇』連続講座Ⅲ、HMP主催(1996年10月〜1997年2月)

1月24日 ローザス「ミクロ・コスモス」

2月21日 ピナ・バウシュ「カフェ・ミュラー」

3月27日〜3月30日HM「ハイナー・ミュラー・アンソロジー」公演(シアター×鈴木絢士演出)への構成協力。

4月「PT パブリックシアター」創刊号、特集・劇場の誕生 バイロイト祝祭劇場の位相、15〜18頁。

7〜8月、アヴィニヨン演劇祭参加文化庁助成公演 黒テント「ハムレットマシン」(佐藤信演出) 上演台本翻訳

所員活動報告

およびアヴィニヨン演劇祭参加。

8月SPACE(静岡県舞台芸術センター)「劇場文化」第4号 現代に生きるギリシア世界—ミュラー／デルフォイ／ゲッベルス、12〜22頁。

9月「PTパブリックシアター」第2号、特集・公共劇場のレパトリー、座談会(太田省吾、佐伯隆幸、谷川道子、西堂行人)「知的エンターテインメント」の創造へむかって—芸術と芸能の境界線上での模索、6〜20頁。

10月31日号、「週間 読書人」、シユニッツラー『輪舞』書評 〈性〉をフィルターに—世紀末ウィーンの裏面を透かしたす

世田谷パブリックシアター・レクチャー(全五回、一二月、三月) プレヒトの演劇世界

11月27日 バールvsゲイ—二十歳の原点、あるいは20世紀の原点

12月25日 『三文オペラ』vs『大洋横断飛行』—黄金の20年代の光と影

12月、Contemporary Dance Company 「リユースレーター」寄稿 ダンサーのまなざし

12月刊行予定、岩淵達治先生古希記念論文集『ドイツ演劇・文学の万華鏡』(同学社)所収 哄笑するテキストと記憶の劇場—ハイナー・ミュラーの遺作『ゲルマーニア 3 死者にとりつく亡霊たち』、掲載頁未定。

1998年3月発行予定、日本独文学会「ドイツ文学」100号特集、Deutsche Sprache und Literatur in der Modernisierung Japans (日本の近代化におけるゲルマニステイト) Tokyo-Berlin-Moskau [Die künstlerischen und ideologischen Bestrebungen der japanischen Theaterleute zwischen den beiden Weltkriegen. 掲載頁未定。]

アレクサンデル・ドーリン

・BETER В СОСНАХ (классическая поэзия танка эпохи Эдо). Составление, предисловие, перевод и комментарий А. Долина. Санкт-Петербург, Липеррон, 1997г., 221с. (「松風」江戸時代の和歌集。編集、序文、翻訳、解釈。サンクト・ペテルブルグ、「ピペリオン」社、1997年、221頁)

・АЛЯ КАМЕЛИИ (японская лирика веселых кварталов). Составление, предисловие, перевод и комментарий

А. Долина. Санкт-Петербург, Липеррон, 1997г., 157с. (「赤椿」江戸時代の民謡集。編集、序文、翻訳、解釈。サンクト・ペテルブルグ、「コペリオン」社、1997年、157頁)
・“ON THE INDIVIDUAL AND CONVENTIONAL IN TRADITIONALIST POETRY”, 東京外国語大学論文集、55号、1997年、pp.73-84.



・福岡 UNESCO50周年記念日本会議参加（1997年10月）

中山和芳

一九九七年に印刷になったものは次の一点のみ。

「植民地状況におけるキリスト教の役割——ミクロネシア連邦、コシャエ島とポーンペイ島の事例」、山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化——人類学のパスベク・ティヴ』新曜社。pp.99-126。

類似した社会制度と類似した西洋との接触の歴史をもつ二つの島で、一方の島ではキリスト教を受け入れながらも現在に至るまで首長制という伝統的な社会制度を維持しているのに、もう一つの島では首長制を自らの手で廃止してキリスト教的な社会を作りあげた。こうした相違はどうして生じたかを論じたもの。

現在進めているのは、日本にやって来た西洋人を迎えた際の座り方を中心とする応接作法の問題。日本人は伝統的には畳に座り、西洋人は椅子に座る。彼らは向かいあった時、どのように座ったのか。幕末までは両方とも畳に座り、幕末の一時（開国前後）には日本人は畳に西洋人は椅子に座り、その後は双方とも椅子に座った。歴史学者はこう

した問題に関心を示さないようだ。どのように座ったかは、最初は異文化接触の問題として考えていたが、日本と西洋との国際関係を象徴的に示すものとしてもかなり重要な問題なのではないかと考えている。日本史や対外交渉史の勉強もしなければならぬので、完成までには時間がかかりそうである。

西永良成

・論文、「上」命者文学と言語の問題」（三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店）一九九七年五月。
・翻訳、ミラン・クンデラ『ほんとうの私』（集英社）一九九七年十月。

奴田原睦明

トウアレグ族の作家イブラヒム・コーニの小説『ティブル』の訳出。

林和宏

数年来ペトルルカ研究の一環として関心を注いできた長篇詩『勝利』の最終章をめぐって、永遠の勝利を額面通りに認める従来の一般的な解釈を斥け、反語的に無の勝利を表わしているという新しい考えを、論文『ペトルルカの「永遠の勝利」の反語』（本学論集第56号）にまとめた。

藤井守男

書評（コロンビア大学発行の「イラン百科」（下記）に関する書評論文。米国のイラン関係の学術雑誌に掲載。原文ペルシア語） *Iranshenasi*, Vol. IX, no.2, summer 1997, pp.370-74. (Rockville)

[*Encyclopaedia Iranica* Volume VII, Fascicles 3 & 4 (Dehqani ~ DivorceIV.) (edited by Ehsan Yarshater, Center for Iranian Studies Columbia University)]

松浦寿夫

・「遠くにあるものの近さ」（『朝日美術館、ボナール』一九七七年六月）
 ・「ルミノポリテイクのための素描」（『現代詩手帖』一九七七年九月号）
 ・「デッサン―ボードレールの微のもとに」（『武蔵野美術』106号、一九九七年）

真鍋求

現在運動生理学と神経生理学の両面から研究を進めている。運動生理学の研究としては、運動のピッチと喚起性作業閾値との関係について検討し、千葉大学運動生理学研究室との共同研究として体育学会において発表を行った。実際の運動場面において運動のピッチはパフォーマンス発揮に大きな影響を持っている。しかしこれまで運動のピッチに関しては実験中画一的に取り扱われ、ピッチの違いによる酸素摂取量や喚起性作業閾値に関する影響は十分に検討されてこなかった。そこで種々のピッチで自転車駆動運動を行い最も高い喚起性作業閾値を示す最適ピッチ数の絞り込みを行った。



また本学教育改善推進費の補助を受け、体力測定方法の検討を行った。具体的には本学学生を被験者として、自転車駆動運動プロトコルの違いによる生理変化の違いを検討した。またエアロバイクが推定する最大酸素摂取量との比較検討を行った。その結果は「東外大フィットネス&トータル・システムの開発・その2」として報告を行った。

一方運動制御および神経科学に関する電気生理学実験は、これまでの動物を用いた実験から、人の反射運動を指標に研究が行えるように機器のセットアップを引き続き行っている。演習を通じて筋電図や心電図の記録実習を行いながら準備を進めている。

村尾誠一

(論文)

「二条為世試論」(『国語と国文学』一九九七年十一月号)

「正徹と新古今集」(『国文学』一九九七年十一月号)

(その他)

「学界時評・中世」(『国文学』一九九七年五月号)

「『小倉百人一首』の成立に関して何が問題か」(『月刊国語教育』一九九七年五月号)

「隠岐本新古今和歌集」(『月刊国語教育』一九九七年九月号)

「学界時評・中世」(『国文学』一九九七年十一月号)

1997年総合文化研究所活動報告

東京外国語大学主催公開シンポジウム

「文化の未来——開発と地球化のなかで考える」3月15、16日

上村忠男・荒このみ・西永良成・鈴木聡・栗田博之

公開講座

「外国文学を翻訳する」10月17日～12月5日 全7回
原卓也・奴田原睦明・河島英昭・三枝壽勝・牛島信明・川口健一・西永良成

公開講演会

「言語体系の中心にある人間」 10月30日

フランス／コレージュ・ド・フランス／クロード・ア
ジェージュ教授

公開シンポジウム

主催 総合文化研究所

後援 財団法人国際言語文化振興財団

「歴史と文学の対話」 11月22日

三枝壽勝・亀山郁夫・鈴木聡・西永良成・水林章

国際研究会

「韓国文学の近況」 98年2月19日

韓国／小説家シン・ギョンスク氏、評論家パン・ミンホ
氏

各種研究会

東南アジア文学研究会 隔月第一土曜日

朝鮮文学研究会 毎月第二土曜日

スペイン語文学研究会 毎月第三土曜日

△編集後記▽

『総合文化研究』が無事船出しました。所員の皆さまには、原稿執筆その他でたくさんのご協力を頂き、心より感謝致します。また、学外からは、ロシア特集の対談ゲストとして、東京大学の沼野充義さんにも好意あふれる参加を頂きました。

創刊号の編集責任者として、今後、この雑誌が一人でも多くの人々に愛され、さらに大きく発展していくことを願ってやみません。また、今年の夏頃には、改めて原稿の依頼など、ご協力をお願いすることになると思います。どうぞ、よろしく願います。

最期に、実質的な編集長として陣頭指揮に当たってくれた吉本秀之先生、そして岸井紀子、鴻野わか菜の両教務補佐、また、コンピュータ入力頼もしい助っ人として最後の最後に登場してくれた福岡由仁郎、吉田耕太郎の両君に心からお礼を申し上げます。

(亀山)